論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目　　ジャヤンタ研究 ― 中世カシミールの文人が語る
　　ニヤーヤ哲学 ―

氏　　名　　丸 井　浩

本論文は、筆者がジャヤンタ研究を著作問題の掘り起こしから始めて、そこから派生する問題を逐次考察していくことで生まれた諸論文を基礎として、それらに適宜、加筆・修正、相互連絡を図り、新たな論考も加えて、一つにまとめあげた結果である。

9 世紀後半に中世カシミールで活躍したジャヤンタ（Jayanta Bhaṭṭa または Bhaṭṭa Jayanta）は文法学の著作や戯曲も著し、「カヴィ」（詩人）としての資質をそなえた異色のインド哲学者であるが、本論文ではあくまでもニヤーヤ学者としてのジャヤンタに焦点をあて、主著である『ニヤーヤ・マンジャリー（論理の花房）』（NM）を中心資料としつつ、彼に帰された小作品『ニヤーヤ・カリカー（論理の蕾）』（NKali）の真贋問題徹底解明もかねて、彼が語り伝えるニヤーヤ哲学の特質を、先行研究に対する批判的検討と綿密なテキスト解読のもとで、ニヤーヤ哲学史の展開の中に位置付けようとするものである。

先行研究概観と論文の目的等を示した「序」に始まり、「第 1 章 ジャヤンタの著作問題と年代論」「第 2 章 ジャヤンタの学問観と『別のシャーストラ（śāstrāntara）』」「第 3 章 ジャヤンタが語るニヤーヤ哲学の諸相―ニヤーヤ哲学史再構成にむけて―」「第 4 章 『ニヤーヤ・マンジャリー』と『ニヤーヤ・カリカー』」、そして「結論」という構成となっている。

本研究によって得られた新知見ならびに残された問題は以下の通りである。

第一に，ジャヤンタの著作問題については，断片のみが伝わる *"Pallava,"* および偽作説も唱えられていた NKali の二書は共に彼の真作である可能性が高く，ジャヤンタ自らがニヤーヤの三部作を書いたと見て恐らく間違いない，という結論に達した。

まず NKali が真作であろうという結論は，真贋問題の先行研究をあらゆる角度から入念に検討し（第 1 章第 1 節・第 3 節），考えうる問題点をすべて摘出した結果であり，本論文の多くの箇所がこの結論とも関連している。すなわち，NKali 偽作説を支持する有力な論拠と従来見なされていたのは、①Bhattacharya によれば、NKali の abhyupagamasiddhānta（暫定的容認の定説）の定義はニヤーヤの伝統説から乖離し仏教的であり，仏教を鋭く批判する NM の著者とは同一でありえない，②同じく Bhattacharya によれば NM に特徴的な pramāṇa の定義が NKali には見られないから著者は恐らく別人である，③NM と冒頭のマンガラ詩節が同一であること（美文家ジャヤンタには相応しくない），という三点である。しかし，①の論拠に関しては，NKali の同定義が NM において支持される定義そのものであり，また同定義は恐らく NM 以前からのニヤーヤの伝統的解釈に即した内容であり，かつそれを「仏教的」と評するのは恐らく中観派が多用するプラサンガ論法（帰謬論法）との混同による誤解にすぎないのであり、かくして①はすべて Bhattacharya が事実認識を誤った結果にすぎず、偽作説の論拠として考慮するに値しないことが明らかとなった（第 4 章第 1 節 4.2.1）。また②も，NM において「他の人々」による修正説として提出された pramāṇa の定義と同一と見なしうるので，著者別人説の論拠たりえないことが判明した（第 4 章第 1 節 4.2.2）。さらに③に関しては、Dezsö [2004] が提起した NKali のテキスト問題を手がかりとして，6 本の写本（一つは写本カタログ中のもの）を照合した結果、NM の冒頭にはない新たなマンガラ詩節の存在が明らかになったばかりでなく，版本末尾の脱落部分にニヤーヤ学派内部の見解の相違に言及する，きわめてジャヤンタ的な特徴を示す読みが浮上し，むしろ真作説の新たな論拠につながりうる点が明確となった（第 1 章第 3 節 3.3，第 4 章第 1 節 2）。またこのほか、ニヤーヤ哲学の骨子をなす 16 項目の 2 番目である 12 の prameya（認識対象）の一種としての artha（感官の対象）は、*Nyāyavārttika*（NV）以降，次第に，ヴァイシェーシカの存在カテゴリー論を前提とした，知覚可能な対象の網羅的枚挙への方向が強まり，ついにはヴァイシェーシカのカテゴリー全体を包括した artha 概念の極大化に至る「正統的な」ニヤーヤ思想の展開の中にあって，NM は「古風な」解脱論的，修道論的な立場を固辞し，NKali もまったく同様の傾向を示していることが明らかとなり（第 3 章第 3 節），さらには NKali の手短なシャブダ論にも，NM のシャブダ論の特質（Veda の権威論証に従属する prāmāṇya 論，および異宗教の妥当性を容認する独特の論理）が見出されたことで（第 4 章第 1 節 4.1.2，同章第 2 節），NKali 真作説はほぼ盤石なものとなった。

他方，*"Pallava"* が真作であると判断される直接的な根拠は，ジャイナ教学者 Vādideva Sūri が同作品名を出して韻文断片をジャヤンタに帰して引用するという証言の信憑性に求められるが，そのほかその韻文断片の一部が NM の散文部と見事に対応していることから，NM とは別の作品として存在していた可能性が高いことを証明し，さらに、ニヤーヤの哲学体系全体を大

木に譬える NM の記述に照らすならば、ジャヤンタが「論理の花房（マンジャリー）」「論理の小枝（パッラヴァ）」「論理の蕾（カリカー）」というニヤーヤの三部作を書いたとしても不思議ではないという，真作説を支持する状況証拠も得られた（第 1 章第 2 節）。

なおニヤーヤの三部作の著述順については、NM と*[Nyāya]pallava* の前後関係を決める手がかりはないが，少なくとも NKali はジャヤンタがニヤーヤ学者として名声を博して後，恐らくは熟年期になって初学者の入門書として彼が書いた可能性のほうが高く、NKali を彼の最初期の作品と考える Raghavan 氏らの見解には賛同しがたいとの判断に達した（結論）。

第二に，著作問題の見直しから掘り起こされた新たな課題から，インド哲学研究全般に及ぶ注目すべき新知見が二つ得られた。一つは，NM 中にしばしば見出される “śāstrāntara”への言及（参照指示など）は，ジャヤンタの NM 以外の「別の著作」を意味するという Frauwallner 以来の暗黙の前提は受容しがたく，むしろニヤーヤ哲学以外の「別の学問」「別の学知体系／教説体系（をまとめた根本テキスト）」を意味していることが，NM 中の該当資料の網羅的精査によって実証されたばかりでなく，概して “śāstra” を「教典」「論書」というように著作一般の意味で理解される傾向が強かった従来の見方それ自体を大きく見直す必要があり，むしろ “grantha” の方が著作ないし著述一般の意味として注目すべきではないか，という見通しが開かれた（第 2 章第 2 節）。もう一つは，同様に “śāstra” の語義問題と関連するが，ジャヤンタが抱く学問観，広くは宗教観も含めた学知・教説体系に対する彼の考え方の問題であり，NM の冒頭でニヤーヤ学の存在意義をヴェーダ聖典の権威論証に求める際に土台としているのは，四ヴェーダを中心とした「14 学」であるが，それに関係して「世間で周知の〈六タルカ〉」に言及し，ここには反ヴェーダ的と目されるチャールヴァーカや仏教も含まれ，逆にヴェーダ・ウパニシャッドに最も忠実たらんとするミーマーンサーとヴェーダーンタが含まれていない。後代のいわゆる「六派哲学」に相当するバラモン系の六つの学統をすべてジャヤンタは知っているが，それらを六つに括る概念を知らない。このことから，そもそも「六派哲学」という括りの概念はいつ頃から一般化したものなのか改めて検討すべき重要課題であることが確認された。（第 2 章第 1 節）

第三に，ニヤーヤ内部の論争も含めてジャヤンタが語るニヤーヤ哲学をニヤーヤ哲学史の中にいかに位置付け，同哲学史再構築にいかに繋げうるかについては，まずジャヤンタが最も重視した「情報源」として Frauwallner 以来，注目されてきた “ācāryāḥ” と “vyākhyātāraḥ”の資料断片をどのような方法で，どのように確定しうるかという原則問題を Gutpta―Schmithausen の成果に依拠しつつ考察し，その原則に即して現時点で蒐集しうる同資料（新発見の資料が若干含まれる）の一覧を，背景となる文脈の詳細な分析とともに示した。その際，“ācāryāḥ” と “vyākhyātāraḥ” が（表敬複数形として）個人を指すと見なす Gupta, Schmithausen, 山上諸氏の観測をテキスト実証的に否定し（学祖アクシャパーダすら単数形），Wezler 論文に

接続する形で NMGr の当該報告の信憑性を裏付けるなどの成果も得られた（第 3 章第 1 節）。他方，ニヤーヤ哲学史におけるジャヤンタの位置付け問題としては，上述した abhyupagamasiddhānta に関して古い論証学上の概念を保持する解釈にジャヤンタは従い（第 4 章第 1 節 4.2.1），prameya としての artha 概念についても解脱論的，修道論的色彩の濃い解釈を展開しており（第 3 章第 3 節），いずれも NV 以降のニヤーヤ哲学史の「正統的」な流れには乗らないジャヤンタの古風な性格が確認された。しかし他方，いわゆる五分作法というニヤーヤの伝統的な論証形式の第四支である upanaya（適用）の解釈に関しては，推理過程での「証因の反省知」という新たな概念を導入しつつ、論証過程での同概念の機能には言及せず，論証を未だに「他者のための推理」として位置づけることを知らない Uddyotakara に対して，すでにその位置付けを前提として upanaya を「証因の反省知」と結びつけて説明する見解をジャヤンタは受容している。したがってこの点では古いニヤーヤの論証学的枠組みが pramāṇa 論の拡大の下で anumāna のカテゴリーに包摂されようとする新しいニヤーヤ哲学史の発展段階にジャヤンタは位置していることも明らかとなった（第 3 章第 2 節）。ただし，ジャヤンタは後代のジャイナ教学者に好んで引用されているのとは好対照に，後のニヤーヤ文献で引用・言及されることはほとんど見られず，ジャヤンタが NV に明確に言及している形跡も見られない。ニヤーヤ哲学史におけるジャヤンタの位置付け作業はまだ残された問題が多いことも認めざるをえない。また NM と情報源の共有性が指摘されている *Nyāyabhūṣaṇa* や *Vyomavatī* との関係について本研究は、特に注目すべき成果に達しなかった。

最後に第 4 章第 2 節において，NKali との比較もかねて NM の膨大なシャブダ論の構造を明確にしたことは，上述の新知見に加えて，今後の NM 研究の進展に資すべき成果として特筆しうるものと思われる。